
THE VINES
/CRAIG NICHOLLS
ザ・ヴァインズ／クレイグ・ニコルズ
PHOTO BY YUKO KATO

THE VINES

ザ・ヴァインズ完全復活！ニュー・アルバム「メロディア」9月24日発売!!

前作が死を表現していたとしたら、こっちは今世紀最大のカムバック・アルバムってところだよ（クレイグ）

ハミッシュ・ロサー＆クレイグ・ニコルズ／The Vines　INTERVIEW & PHOTOS：YUKO KATO



「ゲット・アウト」は精神的なエスケープについて歌ってるんだ。「ゲット・フリー」の続編って考えてくれればいいよ（クレイグ）

▶気分によってはこの上なく傲慢に見え、しかもステージでもファンに悪態をついてしまう。そんなクレイグ・ニコルソンの精神的な不安定さが、実はアスペルガー症候群という病気によるものだと判明。きちんと治療を受けているせいか、現在のクレイグは安定している。傲慢どころかシャイでかばってあげたくなるくらい。ベイビーフェイスだし。が、普通にしてても普通にならないのが彼の彼たる由縁で、髪の毛はほとんど鳥の巣。いやわざとやってるんじゃないかってくらい、巣そっくり。誰かクシの使い方を教えるべきだろう…。

――まず最初にクレイグ、最近の精神状態はどう？

ハミッシュ・ロサー（dr.）：ワオ、ストレートだな（笑）。

クレイグ・ニコルズ（vo.／g.）：ハハッ。うん、まあ、ぼちぼちって感じだね。物凄く気分がいい時もあれば、次の瞬間、物凄くひどい気分になる時もあって…。きっとジミ・ヘンドリックスのようなひどい鬱病を抱えてるんだろうな。

――誰のコメントかは忘れたけれど、あなたに近いある人が、"クレイグは気分がいい時はとても繊細でいい人間だけど、気分によってその逆になる場合もある"って話してたわ。

クレイグ：ああ、その通りだね。自分の思うように物事がいかなかったり、自分がハッピーな気持ちになれない時は、まるで悪魔のようになっちゃうんだ。でも、それは本当の僕じゃないんだよ。本当の僕は、今こうして君と話してる自分、曲作りをしてる時の自分、音楽をやってる時の自分、みんなの前でプレイしてる時の自分だからさ。音楽以外の他のこともちゃんと上手くやりたいなとは思うんだけどね…（苦笑）。

――あなた達は古くからの友達で、もうかれこれ6年以上もの付き合いなのよね？

ハミッシュ：ああ。今のところは、なかなか順調な結婚生活を送ってるよ（笑）。

クレイグ：ハハッ。とにかく、僕はこうして日本に来られて本当にハッピーなんだ。ニュー・アルバムの「メロディア」にも心から満足してるしね。

――とても素晴らしい作品よね。

クレイグ：ありがとう。自分達でもかなり気に入ってるんだ。

――前作とはまるで違う雰囲気になってるけれど、どうしてだと思う？

クレイグ：以前よりもずっとハッピーな場所にいるからじゃないかな。少なくとも僕はそうだね。とにかく、外に出ていい音楽を書いて、素晴らしいアルバムを完成させたいっていう気持ちがとても強かったんだよ。勿論、これまで作ってきたアルバムはどれも気に入ってるし、順位なんて付けられないけど、このアルバムに関しては、新しいスタートっていう新鮮なフィーリングがあるんだよね。ヒット・シングルになりそうな曲も3曲くらいあるし…ってどの曲かは言わないけどね。みんなはそう思わないかもしれないから（笑）。

ハミッシュ：基本的にはどのアルバムもその時期のバンドの状態を表現してると思うね。

――前作はいつもよりダークな作品だったじゃない？

ハミッシュ：ああ。それは、あのアルバムの曲がどれもダークな場所から生まれたからだよ。当時は、ヴァインズにとって最もハッピーな時期だったわけじゃないからね。「キャンディ・デイズ」は唯一明るい曲だったけど、あれは他の曲より2年くらい前に書いた古い曲だったからさ、当時の自分達を表現してるわけじゃないんだ。

クレイグ：ああ、そうだったね。アルバムの中ではかなり目立ってたけど。とにかく、当時は何もかもが黒く見えたし、正直、自分はもう死んでるっていうような感覚に襲われてたんだよね。かなりひどい鬱状態を経験してる真っ最中だったんだ。

――それでも、あなた達の場合、2年に1枚の割合でちゃんとアルバムを書いてるわけじゃない？それってなかなか凄いことだと思うわよ。

クレイグ：それは言えてるかもね。

ハミッシュ：まあ、今の時代にしてはいい方なのかもしれないね。'60年代のバンドなんて1年に1枚、あるいは1年に2枚の割合で書いてたからさ（笑）。レッド・ツェッペリンの最初の2枚だって10カ月くらいの間しかなかったしね。

――今回のアルバムはジャケットもクレイグが手掛けたそうね？

クレイグ：ああ。あるアーティストの助けを借りてやったんだけど、ロゴを作ったり、写真を切り抜いたり、デザインしたりしたのは僕なんだ。

――あなたの写真だけほとんどどれもサングラス姿だけど、それはわざと？

クレイグ：いや、そういうわけじゃないよ。これらの写真が撮られた時は、たまたまサングラスを買ったばかりでさ、いつもしてたんだ。それ以前はサングラスなんてかけたこともなかったんだけど。サングラスをしてないやつもいくつかあるし、わざとやったことでは決してないよ。

――アルバムのジャケットって、その作品のサウンドを表現してるものでもあると思わない？

ハミッシュ：まあ、そういう見方も出来るだろうね。

――このアルバムのジャケットはこれまでのものよりもずっと明るい感じがするし。

クレイグ：ああ。前作の時は、ツアーだってあまりしなかったし、僕自身、誰とも話したくなかった時期でね。でも、このアルバムのジャケットは、"これがヴァインズだ！いい曲ばかりだからちゃんと聴けよ"みたいな自信に溢れた感じがするだろ？サングラスもちゃっかりかけちゃってさ（笑）。大きな違いだよね。

ハミッシュ：なかなかサイケデリックな感じがするよね。

――ええ。まるでビートルズの「イエローサブマリン」のような。

クレイグ：うんうん、この絵は僕が書いたんだよ。とにかくさ、前作が死を表現していたとしたら、こっちは今世紀最大のカムバック・アルバムってところだよ。

――シングルの「ヒーズ・ア・ロッカー」はとても印象的な曲だけれど、あなたにとっては自伝的な内容にあたるのかしら？

クレイグ：そうだね。最初はあるキャラクターを主人公にしてたんだけど、途中で混乱してきて、自分について書き始めたんだ。だから、半分は僕についてで、半分は架空のキャラクターについてなんだよね。

――"誰も自分を理解してくれない"って歌ってるけど、そう思うの？

クレイグ：これは、誰にでも当てはまることなんじゃない？物静かなティーンが誰からも理解されないって思ってて部屋にこもったりすることってよくあることだし。まあ、この曲は僕についてだから、あくまでもロックンロールについて歌ってるんだけどさ。
——あと、“もう失うものは何もない”とも歌ってるじゃない？
クレイグ：ああ、本当にそう思うからね。これまで4枚の素晴らしいアルバムを作ってきたし、世界的な音楽シーンに影響を与えてきたし、ミュージシャンとしてやりたかったことがこうして出来て心から感謝してるんだよ。だから、もう何も失うものはないって思うんだよね。飲みに行ったり、パーティー騒ぎしたり、ひとりでおとなしくしたり、何だって好きなことはやれるし、その中で失うものなんて何もないっていうさ。
——このアルバムの曲は「トゥルー・アズ・ザ・ナイト」以外どれも2分ちょっとしかないじゃない？ポップミュージックは短い方がいいと思う？
クレイグ：うん、そうだね。レディオヘッドのようなバンドの場合は別だけどさ。とは言っても、今でも彼らの曲の中で一番好きなのは「クリープ」だけどね。あれは名曲だよ。勿論、彼らのやってる音楽はどれも好きなんだけど。最近は、タイトルもやたらに長い場合も多いだろ？だからこそ、このアルバムのタイトルは凄く短いものを選んだんだ。
——一方「トゥルー・アズ・ザ・ナイト」はどうしてあれだけ長いのかしら？
ハミッシュ：あれは元々ふたつの別の曲だったんだよ。でも、キーもリズムも同じだったから、繋げちゃおうってことになってね（笑）。
クレイグ：そうそう。正直、この曲はこれまでレコーディングしてきたものの中で一番の出来だと思うね。
——このアルバムはロサンゼルスでレコーディングしたんでしょ？
ハミッシュ：そうだよ。あそこにはいいスタジオが沢山あるし、何よりもまたロブ・シュナフと仕事したかったからさ。彼はロスでしか仕事しないから、僕らの方から行くしかなかったんだよ。本当はオーストラリアでレコーディングしたかったんだけどね。もしかしたら、次のアルバムではオーストラリアでレコーディングして、他のプロデューサーと仕事するかもしれないけど。
——ロブはファースト・アルバムとセカンド・アルバムを手掛けたわけだけど、彼と仕事したいとは思ったのは、自分達のルーツに戻りたかったから？
ハミッシュ：あの2作では凄くいい仕事をしてくれたし、またあれだけいい作品を作りたいなって思っただけだよ。当時に比べて僕らもバンドとして多くの経験を積んだし、それはプロデューサーとしての彼にも言えることだから、このアルバムが最初の2枚よりもずっといいものになるだろうっていう確信があったんだよね。何が良かったって、彼は僕らのアレンジを何ひとつ変えようとしなかったところなんだ。アレンジを手掛けてた時は、ファーストとセカンドで一緒に仕事した時に彼から教わったことを頭において、“ロブならコーラスやヴァースをどこに持ってくるだろう？”とか色々考えながらやったから、完成したものを気に入ってくれてホッとしたんだ。今回は本当にやりやすかったね。
——曲作りの方はいつ頃から始めたの？
クレイグ：'06年の終わり頃からだったかな。
——でも、当時はツアーしてたんじゃないの？
クレイグ：いや、前作ではあまりツアーしなかったからさ。それで、'07年の頭にスタジオに入って何曲かのデモを作ったりしたんだ。だからそうだね、'06年の終わりから'07年の頭にかけて書いたって感じだね。全部で20曲くらい書いたんだよ。
——収録曲について色々訊いていきたいんだけど、アルバムの冒頭に「ゲット・アウト」を持ってきたところが面白いと思ったわ（笑）。
クレイグ：いや、別に“出てけ！”って言ってるわけじゃないんだよ。ただ、“この腐ったシステムの中から精神的なエスケープを果たして、自由になろう”ってことを言ってるんだ。まあ、「ゲット・フリー」の続編って考えてくれればいいよ。つまり、“僕らの



L→R：クレイグ、パトリック、ライアン、ハミッシュ

そう難しく考えることじゃないよ。ただのロックンロールで、脳手術なんかじゃないんだからさ（クレイグ）

音楽を聴けば気分が良くなるよ”っていうことが言いたいんだ。“バンドを組みたければ組んでもいいし、とにかく周りの連中の言うことになんか耳を傾けるな”ってね。
——このアルバムには、「オータム・シェイド」のパート3（「A.S. III」）が入ってるけど、どうしてこの「オータム・シェイド」を収録し続ける必要を感じるの？
クレイグ：別に必要性を感じて収録してるわけじゃないよ。ただ、好きでやってるだけでね。
——「A.S.」と「A.S. II」には繋がりがあまりないじゃない？
クレイグ：僕はあると思うけど。どっちも同じタイトルなんだし。
ハミッシュ：（苦笑）。
クレイグ：そう難しく考えることじゃないよ。ただのロックンロールで、脳手術なんかじゃないんだからさ。勿論、中には「ア・ガール・アイ・ニュー」や「カーラ・ジェイン」、「トゥルー・アズ・ザ・ナイト」のようなシリアスな曲もあるけど、「オレンジ・アンバー」や「ヒーズ・ア・ロッカー」は全くシリアスなものじゃないし。音楽や歌詞が必ずしも知的なものじゃないといけないわけじゃないんだよ。基本的に音楽っていうのは気分を良くする為に存在してるものなんだから。瞑想や現実逃避の手段として使ったりするっていうね。
——「ブレインデッド」は何について歌ってるの？
クレイグ：これは、“こんな世の中消えちゃえばいい。ここから出て自由になりたい”っていうような、この世の中に嫌毛が差してる時のことを歌ってるんだ。「ゲット・アウト」と似たようなテーマだよ。あと、「ライド」や「アウタザウェイ！」のような初期の曲にも似た内容だね。“音楽を車にしてここから出ていこう”っていうさ。
——他の曲に関してはどう？
ハミッシュ：「メリーゴーランド」にはかなりクールなリフがあるんだ。いつか必ずやろうって決めてたパーティー・ソングだよ、これは（笑）。
クレイグ：言えてる（笑）。
ハミッシュ：このアルバムの歌詞は、クレイグがこれまで書いてきた歌詞の中で、一番パーソナルな内容だと思うんだ。奴の心の底から生まれたものっていうかさ。
クレイグ：ああ。「カーラ・ジェイン」はかなり深いラヴソングだしね。過去に「メアリー・ジェーン」っていうラヴソングも書いたけど、こっちの方がずっと正統派のラヴソングっていう感じなんだよ。
ハミッシュ：個人的にはヘヴィ寄りな曲が気に入ってるよ。演奏するのが楽しいからね。
——ロサンゼルスに行く前からアルバムの方向性については話し合ったりしたのかしら？
ハミッシュ：いや、そうでもなかったね。誰々のようなサウンドにしたい、とかそういう願望も特になかったし、とにかく可能な限りいい曲を書いて、いいアルバムを作りたいっていう気持ちしかなかったよ。
——アルバムがリリースされた後はツアーに出る予定もあるのかしら？
ハミッシュ：もう既にツアーには出てるけどね（笑）。オーストラリアは10月、11月あたりに廻ることになってるし、ニュージーランドや日本にもまた戻ることになるんじゃないかな。まだ日程は決まってないんだけどね。
クレイグ：アメリカにもまた行くことになりそうだしね。ちなみに、アメリカには4カ月くらい前にも行ったばかりなんだけど、ニューヨークとロサンゼルスでしかプレイしなかったからさ。
——ツアーってかなり疲れるし、医者からもクレイグの病気に良くないって言われてるんでしょ？その辺のバランスはどうしてるのかしら？
ハミッシュ：オーストラリアのツアーは、週末を中心にやることになるから、たとえば金、土、日あたりにショーをやって、平日にはまたシドニーに戻って数日のオフをとるっていうことになりそうだよ。そうやって短期間でやった方が僕らにとってもいいんだよね。
——ところでクレイグ、あなたを崇拝するファンって本当に多いけれど、それはどうしてだと思う？
クレイグ：ありがとう。えっと…やっぱり僕が素晴らしいアーティストだからなんじゃない？どんな時も自分自身であることや自分の全てを捧げることを恐れてないっていうさ。でも、もしバンドをやってなかったら、僕の人生は滅茶苦茶だっただろうね。
ハミッシュ：きっとインスピレーションを感じる人が多いんだよ。“自分もああやって何か生み出したいな”みたいなさ。
クレイグ：単純に僕らの音楽を気に入ってくれてるからだと思うね。
——最後に、最近はどんな音楽を聴いてるのかしら？
クレイグ：僕はザ・ダンディ・ウォーホルズ、ベック、コールドプレイ、ザ・ミュージック、ラスト・シャドウ・パペッツあたりの新作が気に入ってるね。
ハミッシュ：最近は、オーストラリアのデュークス・オブ・ウィンザーっていうバンドのアルバムが凄く良かったよ。■